

龍  
潛  
室  
禁

天



5  
1859  
1



車秋菴白雄著 拙堂老人補

祝禧室叙琴 全二冊

東郡多埭

萬笈堂 青藜閣



東山居士卯春俳諧寂琴

うゝのたゞさうゝと推乃さの由た

ふゝ私さ果さるて持書八之

ふゝ聲と乃さるゝさるゝ

心無事にすくすく歩む

心無事にすくすく歩む

心無事にすくすく歩む

心無事にすくすく歩む



心無事にすくすく歩む

心無事にすくすく歩む

心無事にすくすく歩む

心無事にすくすく歩む

家業と母と  
すゝめよと

治るは〜母よ〜父又水と

若く〜は〜は〜は〜

き〜邪〜始〜

じ〜と〜後〜

么〜ら〜ば〜

方と授〜は〜

心〜唇と〜

河字の世に事しむる如く  
しるすに心して居る  
可樂の友の心ありて論  
しむるに心ありて居る

事し還る所あり

文化九年七月

富小路從二位刑部卿貞直卿

如渡齋

序

可解不可解之一語不啻我詩  
之論可以論俳諧歌也夫俳諧  
之為歌僅二十七字為一首言簡  
意深且哉其妙處在可解不可  
解之間焉白雄居士此撰解其  
可解不可解之妙至矣而得拙堂  
主人之增補其書初備矣今茲

壬申之夏刻成以予之共白雄氏  
有舊請題數言時新聞小園  
移花種竹日就園丁之事華觀  
撥者數旬聊書之以記姓名而已  
江戸詩人詩伴老人 大窪行  
序



かゝる園はたあはる代々の人の  
手記さすにたかたのけりしもの  
もくろふと今もあはれやその代  
々々々非記のつらさくあはれに  
えうが規模もくろふとあはれに  
いふもあはれにたかたのけりしもの  
あはれにたかたのけりしもの  
人のあはれにたかたのけりしもの  
あはれにたかたのけりしもの

行れしはくみ物もしうしつれとさるもま  
 びくも白字、えくひちもある。おね舟木も  
 一筆本をあつたふんりのしる著記一時的  
 いふはあみ銭アたるれをさるハス縁の  
 一し北御記よりつうんさうたうひさ  
 ぶるそんはーおれられはけけけけ  
 のしうきふめやうりうまはあん、山排仙を  
 といふトよ、は、は、は、を、い、系、つ、  
 申  
 又化のしうのあま  
 三三三

凡例

- 一 此書安永選本寛政選本二品あり
- 一 安永本ふありて寛政本よれき文あり寛政本ありて安永本よれ文あり今寛政本ありて参考後て安永本よある文を坊補せしめり
- 一 章中よ補とある以下は皆坊補也

凡例



文あり又と曲行の文ありふりよ  
 補とあり一章増補せしめし  
 補とあり四と句の増補  
 又章中と補とありかく  
 補とありと黄物のはあ  
 従来字を平めし  
 魚魯鳥馬馬の誤

さきにも引出あるを引出の元  
 人の志を改むるは  
 有明の月野の長明とあり  
 兼好法師は改むるを  
 中とあり

八  
 九

或人集ふよとちよるも 歌名をととふけら  
ちりり

一 各立早の初るふ祖翁の客白とちよる  
西風の規矩と形も其余の客白と  
乃雅吟あして後白とちよる  
載と又鳥群の客白あとの客白載と  
なり撰者白雄とちよるの客白今  
形して白雄及び客白の客白を  
の客白亦白雄と働いて一白の客白

一 世とちよる門赤子の名よとてあて  
その也故よ昔尾よ

一 世一書白祖翁の遺語をりや  
去来史の筆のあてを海猫け  
る醉居士の夜話をあてて三巻と  
形して道よとちよるの詞友の  
あて他見をちよるの詞友の  
争いをのちよるの詞友の  
か沙汰とちよるの詞友の

そのたのあま

かゝのてらに諸あるも儂友のそとえん  
そをも公よせんとそよる所よ罪をそよ  
確して且増補を加へんを上梓と  
著け出ようて正風の儂世よ為擡め  
くあまより推んてそよる罪も亦減却せん  
少年の人産業のひふある時を儂世を  
おき下儂世をなせよ多くそよる歎てそよ  
のそよをそよよ且年中のひふや古奇

古あまのそよをも併へ知るそよてりめ  
あそよをたつてそよれよそよる月花を  
對してそよのそよれをとりよれよ出ふ  
なり又老若隔たりく後話の助よあり  
故よ儂世をそよ下儂世のあふたれ  
るそよのそよはそよを破るそよありあり

拙堂老人稿

俳諧寂琴目錄

上の巻

絶諧の亀鑑

次女情の本

三の情の本

俗情の本

調情新古の本

換骨の本 反體

同業の本

一丁ウ

二丁ウ

三丁ウ

四丁ウ

五丁ウ

六丁ウ

七丁ウ

八丁ウ

九丁ウ

俳諧寂琴目錄

俳諧寂琴目錄

一字の重なるよせてる意法源の事 廿四ヲ

文章のあまりの事 廿五ヲ

文章の成をばしてゐるの優とけの事 廿六ヲ

文章のあまの事 廿七ヲ  
あまの事 廿七ヲ

一句の繁事なる事 同ヲ

歌題の造題の事 廿八ヲ

句の事 廿九ヲ

火ともあふらゝる事 卅一ヲ

漢語の成はく事 卅二ヲ

和歌の言葉の成はく事 卅三ヲ

古事古語古詩古待小 卅四ヲ  
けりきさるる句法 同ヲ

名所をけりよる法の事 卅五ヲ

名所をみりいあえする事 卅六ヲ

名所ふの事 卅七ヲ

名所ふの事 卅八ヲ  
あひいあえする事 卅九ヲ

名所ふの事 卅九ヲ

八

二

けいふあまてらすのまこと

けいふあまてらす

六九丁ウ

名跡ふとをてつとつ

世丁ウ

神祇

世丁ウ

釋教

世丁ウ

憲

同ウ

旅

同ウ

稅

世丁ウ

贈答

同ウ

餞別

世丁ウ

留別

世六丁ヲ

哀傷

同ウ

述懐

世九丁ヲ

懷舊

同ウ

禹瀆

世丁ヲ

發句の体

ききここやちかふる

世丁ウ

そあやうあふる

同

ふくくきくすふる

世丁ウ

ほそくかふる

同

八

三

龍子やうしたる  
 幽玄あるる  
 おうきさる  
 色をうてのる  
 感情あるる  
 親相  
 生髪より對を親お  
 りてさあささるる  
 一作あるる

四十二丁ウ

同

同

四十三丁ウ

同

同

同

四十四丁ウ

### 回文

### 物の名

四十五丁ウ

同ウ

### 中の巻

### 照の本

四十六丁ウ

才三の本 六丁ウ  
 聯句他季うけまの事 九丁ウ  
 二句一意の本 十二丁ウ  
 おもひを乃本 十五丁ウ  
 名所より名所所る本 十八丁ウ  
 志まふ所の本 十五丁ウ  
 大勢の中の人をささむる法 十六丁ウ  
 さゆき月の本 同ウ  
 他の季の花短句の花揃乃る 十七丁ウ

古今和歌集  
 卷之四  
 二  
 目録

あけるの事

十九丁ヲ

意向の事

十八丁ヲ

向うの事

十七丁ヲ

聯々二るの同理屈乃事

十六丁ヲ

聯々諸路のあうらひ

十五丁ヲ

聯々自他の事

十四丁ヲ

下乃卷

こけつゝいあるるの事

十三丁ヲ

共一情の事

十二丁ヲ

廿二理屈の事

同ウ

廿三ききくこの事

二丁ヲ

廿四りのふはききくこの事

三丁ヲ

四時の雨

四丁ヲ

四時の月

同ウ

四時の風

五丁ヲ

廿五尚事かけあえ事

七丁ヲ

廿六古時古語あはさるる事

同ウ

廿七是の文章あまらる事

八丁ヲ

廿八はよき文章あまらる事

九丁ヲ

廿九二級をうたふ事

十丁ヲ

三十思立るの事

同ウ

三十一あやむるの事

十一丁ヲ

三十二あやむるの事

十二丁ヲ

三十三あやむるの事

十四丁ヲ

三十四あやむるの事

同ウ



さしおき

上

廿十五一の自他のり  
十五丁ラ

廿十六其人の意せらるるのり  
十六丁ウ

禁句の事  
十九丁ヲ

不易流行の事  
同ウ

負外  
十五の哉のり  
十九丁ヲ

十五のや乃事  
同九丁ヲ

これとせむきなる水きあのり  
同十三丁ヲ

同録終

俳諧寂琴卷之上

白雄坊選著

拙堂増補

古池や蛙飛こむ水の音翁

道のまの木槿も馬も冷きなり

この二句は蕉門の要領也つとめてる人

おとろひや藁も冷あはれ海苔の砂翁

やこそ死ぬるももんも探の事

夏来てもももんも探の一葉哉

あのをとち福けりともくたうり子 翁

此秋をゆり年よりれをりき

やもかもなりてやその花尾花

四時の観相けり歯牙の味ひて正風の  
首領志る

補

去昔法平曰古奇と見たり先抄をるる  
あ我義理をとりてさて義理ふあ  
ゆらぬうはえを別まてと他是長  
得失にあてられ教なるへい徳も又  
今毎に再三吟してそ義理よあて  
あ古今人の一致あるに於て  
のり西風の音をゆり呂十七文

うしあての解とる瓜うとよ  
味とるさぬハ妙處まらか  
たさう向くかをりは  
捨るうを解かをりは  
あふあらゆらんとい日  
けして味ある我徳の上  
ふ志さうい其得力を  
たりり中さうて

まきもやきしきやうふ月梅 翁

ほくまきやゆり花を以て

白雪もさるさぬ秋の

初しを猿も小蓑をほり

上

西流すいづんとあけりのおきまは入る  
のまきあしり冷しく思ふるは竜鑑  
まきあ

去来西風の大ききを同

祖翁曰此詩よりくま物より急なる  
ことばをいひまきあ祖翁の言よりまきあ

まきあ物より急なることば

又曰此詩よりそのを懐むこと西の領

こと自他の親おきまきあことそのをまきあ  
こと草木のまきあはまきあこと其のまきあ

ことまきあむやまきあ道より取れを思ひ

むらうきまきあことまきあ念起らる

ことまきあむらうきまきあことまきあ

こと別風體の一句也まきあことまきあ

こと親おきまきあことまきあことまきあ

嘆まきあことまきあことまきあことまきあ

風西の風情也俗よりくまきあ  
あきああきあ

補

西風の流れをまきあ古不易の句体にて  
まきあまきあ不折をまきあまきあまきあ  
祖翁もまきあ延喜式天和の流り異体も  
亦多し異体より流りて流りて  
一時くまきあ風まきあ流りて流りて  
とも廢るまきあ之仙化曰其角没して  
後漸三年まきあまきあまきあ  
まきあまきあまきあ去来曰流行の  
句まきあまきあまきあまきあ  
まきあ也形容衣帯まきあまきあ  
まきあ時くまきあまきあまきあ  
西風よりまきあ風まきあ亦流行なる  
まきあまきあまきあ西風と流り

西風

上三

むすむ氷のこゝろ氷のあはれあはれなる  
 なり一うあして一一あして二之世より  
 夫らさしめてまゝ風をひら作らざる  
 或は理屈とて落或は流をさして終ふ  
 名もほゆるぬのゆきあしん或は家際  
 寂連の婿也寂連お具して大丈  
 入道のあまのうみ子あまのこ  
 中さうれて曰この仁未来の哥仙  
 見え春の夜経ぬぬゆきついでに  
 きさをひらも哥仙もあまのこ  
 んんこいつのうみ子とて感  
 中ささしとて也絶世のこゝろ  
 西風よりあまのこをさしたる  
 愁乃の真情よ得るそのあまのこ  
 けりやくとてあまのこをさしたる  
 小あまのこをさしたるあまのこ  
 一以貫之とてあまのこをさしたる

のこつなりとて考ともあまの忠とも  
 さあまの仁ともなり義ともあまの  
 おりあまのあまのあまのあまの  
 こまのあまのあまのあまのあまの  
 まゆしを担着これを見て  
 実を妻をりて絶世とて  
 志えしとてあまのあまのあまの  
 の翁也躬恒貫之再いふ  
 意をひらしてあまのあまのあまの  
 造化りやくとてあまのあまのあまの  
 一風とてあまのあまのあまのあまの  
 あまのあまのあまのあまのあまの  
 てとてあまのあまのあまのあまの

蓬萊よりきつた也伊勢の初夜 公翁

目のまをさしゆくふ替のゆもて哉 其角

止 四



如し前後の篇は補らるるものありて  
已ら心とお合さるる時をいふはむして  
例の自らのたのしみをいふは  
**補** 例の自らのたのしみをいふは  
時をいふはむしては能く出さ  
彩境をいふはむしては能く出さ  
得

たのしみをいふはむしては能く出さ  
得

鹿のまゝよくの歌はるる夕の光 一 髪

かゝのまゝよくの歌はるる夕の光 一 髪  
さるるまゝよくの歌はるる夕の光 一 髪

**補** 詩法要標云詩之義意不一要其

歸不過情与景而已情兼景者上也  
偏到者次之

偏到者次之  
情の風情のまゝよくの歌はるる夕の光 一 髪

又情中寓景景中寓情あり  
又云惟情可以全篇言然苟無法注之  
易入流俗故曰融情於景物之中托思  
於風雲之表者難之  
情を眼あらしめるまゝよくの歌はるる夕の光 一 髪

谷川やふも代わらるる秋の暮 益 青  
今杪し竹の葉ありゆの涼 柎 居

こゝろくわて風情をいふはむしては能く出さ  
得

こゝろくわて風情をいふはむしては能く出さ  
得

止 六

句々次の章ありあり

三の情の事

余情を海をこり志すはなす一合乃  
すしあももゆる人余情の流海よのそ  
ふみり通情ををるくよこり我を  
しやうす親つみ朋友の情をさすりか  
まのそとのさあやうす夕の露のりうを  
あんといはきををる情よあすはすこり  
るすりし情をあすこりすはすの  
情あすはす人なふをりし情をきり  
情をさす中の末す出さ

補

情を言がふはなすの情をりし  
しとすりし情をりし情をりし  
なりし情をりし情をりし情をりし

おもむきなり

枯枝ふからよのやはらぎの秋の暮 翁

寂しき情をりし情をりし

秋の暮をりし情をりし情をりし

寂しき情をりし情をりし情をりし

寂しき情をりし情をりし情をりし

海のかげに流るる花のそく流るる 元兆

寂しき情をりし情をりし情をりし

寂しき情をりし情をりし情をりし

寂しき情をりし情をりし情をりし

七

源らるる余情をあらう

野らるるをゆる風を志むるは 翁

捨身掛命の行御をぬりいふまじし  
時の白たよりよきまじき色を情ふしき  
まじく人勝を對ふまじき

秋のまじき日のあつの明やまじき 猿 雖

まじきちめの湯はあつぬまじき 鼠 弾

申くまじきをこそまじり秋の暮 肅 山

朝あつての程もまじり人乃らるる 和 及

こころまじき句くまじき通情をまじり

あつてをあらうまじきあつてをあらう  
まじきあつてをあらうまじきあつてをあらう  
まじきあつてをあらうまじきあつてをあらう  
まじきあつてをあらうまじきあつてをあらう

補

まじきあつてをあらうまじきあつてをあらう  
まじきあつてをあらうまじきあつてをあらう  
まじきあつてをあらうまじきあつてをあらう  
まじきあつてをあらうまじきあつてをあらう

補 俗情の事

俗情といふまじきあつてをあらう  
あつてをあらうまじきあつてをあらう  
あつてをあらうまじきあつてをあらう  
あつてをあらうまじきあつてをあらう

古今和歌集

十





定家々曰頃ハ三代集ハ出る多ク  
能作も亦意を新らしくする能  
用してあると謂ふありては俗  
を爲す或曰能作も俗徒平作を  
はくつとも何れをさしつるふ  
俗徒平作とて歌連歌よつり  
能をもはくつるをいふと但一  
あもつれものなり

さしつるも あつとも 意こころ  
いふ是を俗徒平作といふは歌連歌よ  
けつりぬるも能作もさすもはくつ  
いふと之俗徒平作を都言つるの  
いふと又新詞なりともあつるも

賽浅も用意教るなり花乃森 去来

祖翁曰花の森とてまたれと名所

あつても古人も亦の意とて中  
詞を細工してかゝる拙きなり

詩に詩法あり文に整字あり歌  
りやうなり能作も能作あり祖翁  
よの及を季の及よまのい傷を  
とるき能作も宗周も及のあつる  
新詞もよるなりぬるのやぬる  
亦の花を花の及と顛倒せる  
細工して拙きと制しぬるも  
るのいふなりいへん也文盲  
許六曰よまも仕損あり下  
はは換なり能作の底のぬ  
きも時を折ちよつるも底のぬ  
きも依その新詞なりか  
自中よたしゆなり



ゆきすすもくすてはめらるるを  
ゆよ又ゆよゆよゆよゆよゆよ  
おあつるるるるるるるるるる  
つめらるるるるるるるるるる  
はりのあつるるるるるるるるるる

換骨乃事補反替

補換骨とも同くしてるるるるるるるるるる

あゝのらゝの唇を〜秋の風 翁

唇も唇を〜秋の風 許六

次身あ〜たる〜たる唇の秋の風を  
あて換骨をさるるるるるるるるるる

又

塔の歯くもさし奥の店 翁

塔かきと猿の歯も〜塔の月 其角

其角曰け後反替して猫の歯ふり  
〜の海人の歯白〜のあれふふ乃  
一作をば〜んあ〜等類の註あり  
あ〜は〜は〜のゆきをば〜あ〜さ  
味いあ〜ら〜むる〜

補

徐陵鴛鴦賦曰

山雞映水那相得 孤鸞照鏡不成雙  
天下真成長會合 無勝比翼兩鴛鴦

黄魯直題畫睡鴨曰

山雞照影空自愛 孤鸞舞鏡不成雙  
天下真成長會合 兩鳥相倚睡秋江

又

鬢為愁先白 顏因酒斲紅 樂天  
短髮愁催白 衰顏酒借紅 右山

~~~~~換骨の待たし

ほろきききつるからぬふもむき  
まゝあがりぬの月そのまのぬ  
有ゆの月ふあんのやほろきき  
たむとまのけいもえい

後徳寺在六尺

宇治前大政倉

~~~~~換骨あはる歌あり

又

人の親のかきよほひり雀のま 鬼貫  
雀のあはるあひりり人の親 大馬

~~~~~ゆもゆと換骨あはる体と

人の親の焼野の雀よあひりり 曉臺

是をたあ乃鬼貫るるり及持たし  
きりりゆりり換骨ともかきき

補 同業の事

~~~~~  
~~~~~

首の母のみのりて入せりるをみお 翁  
志の牛をのまをえせり風乃秋 許六

去来曰同業のるふるる

挿の輪やまいて鳴かむ懐悴 昌房  
石くえて歟嗚やむ月あか 居行

こころのるるをのりてうらみさるる  
鳴かむをのりてうらみさるる  
けいこころのるるをのりてうらみさるる  
同業とも又同業ともゆりあはるる  
ゆりあはるる

きくくくくくくくくくくくくくく 宗次

けいこころのるるをのりてうらみさるる  
のけいこころのるるをのりてうらみさるる  
出れこころのるるをのりてうらみさるる  
魂を入きてこころのるるをのりてうらみさるる

人酔く牧りくくくくくくくく 柴居

かくくくくく形容を同くするありて自他  
のくくくくくくくく天地無隔形の  
同業反増の類をすめりてさるる

補 一字の志をうらみくくくく浅深の事

祖翁曰一むりくくくくくくくくくく  
一字の志をうらみくくくくくくくく  
此れゆきまのくくくくくくくくくく  
るくくくくくくくくくくくくくく



いづれもはなれあはれをこそぞおぼしめし

吟をさしとくはるるささきあめりい風接の  
うへの病こそささき切字のささきしとて文字  
あまきささきしとてあしりつめやみよ

朧月や あやえ朧や

こころの文をよめりをささきよ  
月接り 朧やあやえ

かくりりささきささき言禁ささきあまき吟ささき  
おはよたささきささきささきささきささきささき  
連続し二三の字をあまきをよめり  
二四の字をあまきを接しとくも二四の  
字をあまきりしとておぼしめしはささきささき

補

二四の文字をあまきりしとて

雪をりく人を体むる月見哉 翁

雪をりく雪の中ぬささきの曲の色 吞霞

二三の文字をあまきりしとて

雪をりく雪の中ぬささきの曲の色 吞霞

雪をりく雪の中ぬささきの曲の色 吞霞

古人のささきよ二四の字をよめりしとて二四  
あまきりしとてささきあまきりしとてささきあまき  
ささきあまきりしとてささきあまきりしとて

文字をあまきりしとて句の優をけしとて

あまきりしとてささきあまきりしとて河豚汁 翁

いづれもはなれあはれをこそぞおぼしめし



上の五十五をみりしる

やせ山の花のよの向のむ見し鳥 鳥醉

この一冊とありて由あることとて一冊の  
優なりとありてけしむるのむ話ありし

きのぬきしをふ出たりしむら  
このむらみとくのとてふむ

このむらみの文章はむらみとてふむ

補 文畧

命あるとて春のむらみはせ山 白雄

けしむるのむ話ありしむらみとてふむ

命あるとて春のむらみはせ山のむらみのての文章  
けしむるの優よありしむらみのむらみとてふむ

文章のむらみはせ山のむらみはせ山

きぬきしむらみはせ山のむらみはせ山 翁

このむらみの文章はむらみとてふむ

みじの山の秋のむらみはせ山

けしむるのむ話ありしむらみとてふむ  
このむらみの文章はむらみとてふむ

まじりくは風のうらめしき 孫のぬ 山嵐雪

晴れぬとありては風のうらめしき  
感傷しあつて晴れぬ懐悼の念も晴  
孫のぬと嘆息の吟あるよそも

くもは霞のうらめしき 孫のぬ

くもは霞のうらめしき 孫のぬ

一句の禁さすいおるなり

朝のうらめしき 孫のぬ 翁

朝のうらめしき 孫のぬ 翁  
おの行脚をよひきこらるるうらめしき  
風物の情懐中をきこるるうらめしき

まじりくは風のうらめしき 孫のぬ

まじりくは風のうらめしき 孫のぬ 山嵐雪

越人へ挨拶のうらめしき

越人へ挨拶のうらめしき  
そしめより女部志の女とよみまを  
鶯の鶯とよみまをうらめしき  
孫のぬと嘆息の吟あるよそも  
おの行脚をよひきこらるるうらめしき  
風物の情懐中をきこるるうらめしき

歌題他踏題の事

補

歌題とよみまをうらめしき 孫のぬ  
おの行脚をよひきこらるるうらめしき  
風物の情懐中をきこるるうらめしき

神垣やおもひのかきよはげお像 翁  
綿ぬきもや松風ゆきりけくはる 野水  
角融りたりともや秋の唐紙 嵐雲  
暁の流波りともや念佛 其角

こきこきいぬけ歌ありぬけ歌いひのあま  
洞中まじりてしり幽玄よつこくひくろふ  
落入せきしりあふさくしり

かこくまぬをまなく乃梅柳 翁  
まらるや解ふ葉集する椽の先 山雲  
はらまらる春中えて母の林こもく曲 翠

五月ふもや磯のあふれ葉 椒 嵐雪  
かろくろやぬきそはて葉や秋の風 杉風  
まゐりのあふれしりこく清衣の 立志  
應くともくろたりたともやその門 去来  
いづ中りた時あかきぬく瀬田の橋 大草

是等もく歌歌なりぬ力けよきも  
まらるあへしかりのあふれ葉をこく  
けしきせきまらるをこくぬけしこくあふれ  
歌歌ぬけ歌と別よせしあふれあふれ  
糸とぬけ歌をぬ力をけりぬ  
こくまらるあふれしり

付乃事

蝸牛角ふまを須戸ぬ石 翁

補 世のつらさをいふ事あるとらるるもよりのてあは  
とあちあり揚子の角の上より寧ろいふ  
固簡といふ玉あつたをたふはよき事いふを  
たふする事たふすの事いふ事いふ事偶言り  
たりし事いふ事いふ事いふ事

いづのちとまききて野さの鏡哉 工迪

補 雄略天皇の清き野の鏡とていふ事いふ事  
半くはささせの事いふ野さの事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事

卯をむむしは尾のはらの加茂端 其角

補

うの尾のつらさをいふ事いふ事いふ事  
くのちとまききて清女の事いふ事いふ事  
卯をむむしは尾のはらの加茂端  
をいふ事いふ事いふ事  
軍書その結して古代の事いふ事  
あえとまききていふ事いふ事  
あむ事いふ事いふ事  
せむ事いふ事いふ事

義仲の妹首の山を秋虫 公羽

こといふ事いふ事いふ事

補

祖翁の事いふ事いふ事  
といふ事いふ事いふ事  
流るる事いふ事いふ事  
貞事いふ事いふ事

八  
上

吟うらからしほゆめき中なるうらほし  
却て延宝てゝおのひもあつて西金のふか  
おきくましくおき

補 火を由水子いゝあき事

清補うあ後おりぬれと火をよめあ  
いひあふとつるふうのうら火をよめあ  
おえちうひのよめあゆらぬ氏おお  
おのよめあゆらぬ氏おお  
いひあふとつるふうのうら火をよめあ  
おえちうひのよめあゆらぬ氏おお  
おのよめあゆらぬ氏おお

控 吟うらとまけいおきし 雜ふの芭 翁

かなうかおおあきさふあおの花 支考

是あを火をよめあゆらぬ氏おお  
あおあおあきさふあおの花

吟うらとまけいおきし 雜ふの芭

これらも同一類のふあ

白雄曰火をよめあゆらぬ氏おお  
一情をのく際ふを解くあをよめあ  
あきさふあおあきさふあお

漢語をけい事

馬より残る月をさし茶の煙 公翁

小おの中山の吟うら

三十一

杜鵑啼也湖多水のこゝ 濁り 大草

好きてせつとりのあめをあ〜と残る  
湖多の歌は皆漢語にゆ〜正風めら  
落る花端午涼夜さ〜もはく〜あり  
元日 灌佛 名月 蠟八 寒食  
こま〜の歌つら〜も漢語あり

補蝶葉

よれら〜と古〜の〜 刻あ〜と〜と  
和歌者流ゆ〜のき〜と漢語ゆ〜  
羽ふ〜と他社〜とや〜りのり〜も  
あり

名月也游るふり〜と七小町 翁

順禮〜とち〜と〜と 嵐雪

一角のうら〜と〜と〜と〜と 処〜と人  
あ〜と〜と〜と〜と

和歌の言〜と〜と〜と 事

紙きぬのぬるともお〜と雨の花 翁

袖〜と〜と〜と〜と 衣月〜と 素堂

先〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と

三十二

三十三

初あつたまふ葉のむらさき  
ふらふらなましこの日の  
なりやうくもあしそかの  
へうま

補

わかまよりもほろくとほし柿の葉 貞徳

あまの流りし和歌の  
古の流りしあまの

脰や世を河一曳の山かせと 春暁

あまの流りし和歌の

古事古語古歌古詩あつたのうた白法

知足軒新居の賀

ささの家や雀うろこよ背古の粟 翁

淮南子説林云

大厦成而奠雀相賀

ささの家や雀のあつたの粟

撰集抄云中勢元輔翁の哥二首  
すさの家や雀のあつたの粟  
ささの家や雀のあつたの粟  
ささの家や雀のあつたの粟  
ささの家や雀のあつたの粟

あつちや日ればなるも秋の風 翁

明詩選

秋風吹持暮 古道行人稀  
登此微陽色 射我霜中衣

石ゆしや言門あきそ夕と云 牡年

源氏常夏の美をい

あつちや川のゆきもさうのものを  
あき入あそきてけしすのうらと云  
ゆいゆいと鮎の魚あつち

春もあつちや朝の雀の顔はさ 一髪

清女枕草紙の  
あつちの顔つきいしうらと云  
あつちと云

春の海も羽白ま鴨赤か 忠知

古伝日記

あつちと云のねをさるそゆいしと云  
あつちと云のねをさるそゆいしと云  
あつちと云のねをさるそゆいしと云  
あつちと云のねをさるそゆいしと云  
あつちと云のねをさるそゆいしと云

あつちと云のねをさるそゆいしと云 其の角

古今集

あつちと云のねをさるそゆいしと云



かきとく人あもふ秋の夜のみ

あまのひまもあまふちうたの言 公卿

兼好法師のふり

あまのこたよふ人あもふ秋の夜のみ

かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
古詩古歌古語いさゝかもそ古詩古歌古語  
古詩古歌古語いさゝかもそ古詩古歌古語  
古詩古歌古語いさゝかもそ古詩古歌古語

名新をばくふ句法の事

はくふのあかきあまのや瀬田の橋 公卿

下京やまはむくんのあつらぬ 凡兆

木舟寺ふらの會あつらぬの月 其角

かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語  
かゝのこゝろいさゝかもそ古詩古歌古語

名新をばくふ句法の事

ひまわりとふ塚の庭を眺むに  
翁  
吟はしやふきの白ひの捨るの  
岱水  
ほりれもて誠の友人を誼を  
素牛

こころをよみてあそびまわす  
所よまわすよまわす名所の  
あそび必もいあそびあそび  
古和歌の句くを考ふるふ  
て是等の句をいひ出せし  
古人曰ふは海そのひくす  
ては人々の洛川の蜜径を  
ゆきゆくゆき出たらん  
あそびあそびあそびあそび

ひまわりとふ塚の庭を眺むに  
翁

補 猿蓑集云望湖水惜春とて  
あり或はあそび送別とて  
一時の誤のまじりあそび  
惑りて一盲衆を引の四  
た、あそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび

五月のふきの浮きを  
公羽

と并きよの門た  
あそびあそびあそびあそび

あそびあそび納代の氷  
出さん

如時乃向く幻修庵の母の  
みりへい

名新ふらむるの句の事

三木のまのやまらめい古き佛蓮 翁

朝々くより舟深しや夕さら 去来

むし路やいふもあはる時ふ 舟泉

洞合ふも馬よのむしや須の里 大草

はるさしりそはあをひるも  
舟深くわしうさうさあや  
しんら

補註翁曰名新ふの事  
るをいひ出

らんあさす日女あつそのこと  
すうのさあ

又

高野山ゆき

父母の志をいふは  
翁

角田川あはく

いさのちとほの船合は都る  
貞室

鎌倉の山

眼よまふ山は  
素堂

當上寺の曼陀羅をぬる

る衣らうか織らぬ羅海  
園女

八島あま

海人のあまをよみしむはなは 千箇

伏見の舟船

あんのろあま一落かゝる夜哉 路通

まの保みそ

はみのろも鬼のりもひと原 雉舟

瀬向あま

我弱の留あゝるあ人橋の雪 湖春

是筆やまはるをわたりありてそを名を

あゝいさくあまーくも也をほめけいひのや  
うり景あを一向うむいいてあまよも  
一法ありいさ他の名あまよすまのれまに  
やうよんわへー

名新ふのそと古歌或は古さを思ひ

あまよる事

裸みまゆきあゝあめ風ふね 公羽

増かえあまの大悟をみりいひそそれー  
向あまよとてあまよ  
西行の涙をまとい増賀の信を感  
こゝろあま

程えんきーまよゆり新の歌

あはれみの花のちのちのまはる  
あはれみの花のちのちのまはる  
あはれみの花のちのちのまはる  
あはれみの花のちのちのまはる

白川の閑寂るころ

夕の花をかしふ閑の曠るころ 曾良

古人冠を正しきころあまをさひあそぶ  
りしころ

五條の指のうらみ

持さるる人切の指のうらみ 桂士

和名の浦み

ふり持をとおふよ屋を以て持 鳥醉

和名の浦を以て持を以て持  
芦田を以て持を以て持

名持の浦を以て持の向の事

から形八杖実坂を落る哉 翁

光廣の紀り

くさむをてからり通る諸人  
くさむをてからり通る諸人  
くさむをてからり通る諸人  
くさむをてからり通る諸人

さいまを

七

八九

ふらふらの車ははせしや一野山 夫考

ひきうりりふ名ふの難のうりし出さん  
あまうらうらの中へ夫りをとこむる秋  
ふく向中へさむいし自然と終たふ  
かうしりてさしむこのまてこころのゆめ  
あつとまをさくもいしまをさく

補てしむりて句の意を添くするに

はらうらふらふらふらふらふらふら  
せぬらふらふらふらふらふらふら  
のさうのこころ

さるふらふらふらふらふらふらふら 公利

さるふらふらふらふらふらふらふら

文君の仇喜も酔のすけ  
あつとまをさくもいしまをさく

酒初をり 秋のさきせよあつとま 惟然

傍よわらわらわら

ちねとねのふあまをさく の花 越人

去来田園雲の一体の句としていひお  
せしや 候ふらふらふらふらふら  
接するらふらふらふらふらふら  
体形をさくはあまをさくそのは  
をのさくはあまをさくそのは  
中さるらふらふらふらふら

其の罪をみんてさく人を悪あま



らんさく西よめを伐る言  
東よめを院くの鏡の色  
なごの底よここ入寒言  
清石とりめ句をいせを

高石の埜の空をよそしむ山 其角

うしやまの山あり

救世大士をみつゝをそめて  
勾欄を寄るかかりく寛  
あるな少ぬをそのせむり  
山みりーの風をよめり  
梵をよめり樹をよめり  
わくして後を房の書帙  
をみりし錫のたらしを  
野のやうはやくし

ゆきをよめりかかり  
不條の地たるこころ

新樹のく大親言のやうな 白雄

初縁の吟たるあま

初縁のあまの細言許六風俗文選の  
を藝覧とてしきりてのち室のあま  
虚よあそぶをを書る文飾さる  
よそとて虚より虚よ走るへう  
中の俗言鄙言の交りしりん  
輪屋とてえりしりん今令の文  
又ふふ多し西刺龍のしりん  
終合せしるは終りしりん  
をうく味い



神祇

ふらうとらの皆中もいぬは遷宮 翁

梅つや湯とこの秋の暮のまき 丈草

昔海苔も和光の鹿のまゆり 許六

他流よいつふ五音連声等のるり風  
子よの細さうしあはけさうをさう  
あしうたさう

あな清くぬきさ

梅つや湯の色今おま

おくの類い神祇ま納のまらうと

軍且暮程の吟皆けいん終るなり  
ま納よあうさうあ神祇まをまは

釋教

親まの夢えんやうり花の雲 公羽

おあらしもむのうもは山哉 般ホ貞

法然上人五百奉忌

以代まや瓜一枚の法のみと 露沾

まゆゆりあすくたの神祇と回  
けさうをさうあしうたさうの釈教  
の句は其用を

三三三

窓

紅梅也えぬ意けり玉の簾 荷分  
秋ひをそとけり推してきて無ぬ夜は 文洞  
虫ほの目より枕ももる哉

あやのほとくはあやとく  
秋のうとくはあやとく  
自のおもふとくはあやとく  
細くはあやとく

旅

舟より脱てじろふ有ひぬ更衣 翁

草はゆくらそ母より人時同む 山川  
その跡お推してあやとくはあやとく 本草

旅舟のりきあやとくはあやとく  
とくはあやとくはあやとく

祝

先程く梅を人のあやとくはあやとく 翁

駒を拜領せし人へ

時よし肥くる馬より秋より紅 酒堂  
其の角より新宅あり  
世もあやとくはあやとくはあやとく 涼菟

祝の句はきく自他祝詞をいさす  
る

贈答

醫師何うしりりやめて

茶掬りいりまの花をうら

公羽

婿縁落柿あそ二と

夏集地也いさや麻のふゆ

曾良

夏集地也いさや麻のふゆ

凡兆

縁のりてあそいり

山川

けうくそ子親鳴き風呂あそ

助叟

同人をうら

由生

鳩眠るふそぬるやそ

言水

葦舎より菊をうら

命

みりうらぬるそり人をうら

土芳

りりあそいりりあそいり

斜影

中あそいりりあそいり

如行

或人よりうら

けあそいりりあそいり

木因

みづの日記をよめりて

君えよやふまのつらき世の桶 嵐雪

猶そこの白む自他親疎をこころすしよ

### 餞別

猶のふあつとくもを流田のふ美 公翁

翁の首途をぬくる

公相根の志くきあふ日をたひたり 由之

友なる孤をたもてる

雲をあやまらしむるゆゆぬしり 野坡

綾子の白自他親疎をワきすよふ

### 留別

川崎あそくくよつる

あまの袖をちるふはむ別をい 公翁

あふをくくぬ日

思ひまらふ却の秋をくくる日 素心堂

途中あそく翁別をなると

三六

行くくまきりしきあはよもさ秋のふ 曾良

留別の句む自他秋縁をりきまじり

### 哀傷

門人嵐蘭の此中より

秋風の折るかおしき幸ぬの杖 公翁

其の角の母をりしあひ

郊のきよくねきやねすしんき

公翁のこの句も

ゆるゆるのさあさのぬみみの菴 槐市

あしつたや膝をかへてみまのま 野坡

公翁の送茶母

あまかみかみかきや枝尾屯 其角

翁の文は

あまのこころをわおの娘うれ 北枝

母とこころしなひ

あまのこころをわおの娘うれ 其角

妻もくさくさのこころ

水も月の相のひびきもくさくさのこころ 野水

あつたあつたのこころ

柳の影のあつたあつたのこころ 落梧

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ 尚白

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ 去来

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ 史邦

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ 鬼貫

追悼

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ 許六

あつたあつたのこころ

あつたあつたのこころ

母の年回し

花よりけしけしける花よりけし

其角

ななる工齋三之圃  
こころも昔を人ともわたりて

三人の春ふらりとあふの風

痛のこたふひいふ中  
お目んせうな恨もくも憂人  
まふし

志しぬ人の志し惜いしをさるる下

元翠

哀傷の向心自他親疎を  
祝勝各感不別哀傷とて人

對しつゝの句なりたそく人句以つらなり  
まぬあまのわたり

終つて代も涙あもえ春乃鶯

わくつゝとららふはよこそ人を終りて  
鶯ともよも涙あもえ春乃鶯

あつてつゝとららふはよこそ人を終りて  
や別なりつゝとららふはよこそ人を終りて  
あつてつゝとららふはよこそ人を終りて

迷懷

多きものせぬ縁海の果や秋の會 月

ほろろのりこすたをわきの秋 八橋

葉かきとてらんて由新島の浮世

野坡

懐舊

高館の古戦場みそ

夏草や兵やもろみみの松

鳥

翁の経多の一巻の写し

いこを叶山鍋洗ひ一松やこれ

曲翠

母を夢みるらん

世のまをぬじし人の乳房が

風洗

画讚

穀骨の画

稻けりや教のやまはるるの穂

公翁

源氏の画

傘持の月よみくくはあのか

其角

花女の絵

よのかをぬきよてあるを園の月

鬼貫

布袋の画

大虚涼一禪師の指のこし

其角



人麿の繪

月夜の鏡なるより清くそ人 才磨

儼ハ他の白よりつゝるる

ふりのとそくは輝く

其の角の白くゆるりて集ふ東城の鏡と  
あせり角のるあていつて澄たるるる  
笠重曇天雪とつる語を及轉の  
向よりとる角のるるかたて澄り  
あてり  
又かゝりの澄り

あめの中にお暮の語をかじり

あてり

つらんきやうなりけりあてりあてり  
あてりとは是れ門の軒さより待ハ有聲の  
画画とを聲の待りたり古人のあてり  
あてり故よ澄りたる画の餘情をい  
てり

青嶺やを波ゆるゆる春の色 素堂

あてりやるもゆゆるあてりあてり 翁

きかぬ桐のひとあてりあてり 其角

あてりあてりあてりあてりあてり  
あてりあてりあてりあてりあてり

補 或人枯木よ鳥のとあてり画よ秋  
のさるのさるをいひるるあてり

蒼蒼如く飛たさる由野人亦秋の暮 白雄

心腹句の体をとくもの句

まじりさよふおろなる句

そらの空を清くよとせらる浅きよを 公羽

うごくとも又く借圍らり林下哉 去来

志くうくくをあそぶる生樹をれ 法蓮

くくくくくくくくく

汐哉や鶴腫ぬきて海涼し 公翁

名月やるまのうへお松のか針 其角

まゐるのむくく鶴のむくくま 桃賀

あ〜〜〜〜〜

杜宇大にむくくぬめふ月夜 翁

湖をぬく中さりのるま月る 去来

若くはうりたあ〜くゆふぬのむく 杉風

あ〜〜〜〜〜

よ〜〜〜〜おあぬきたや〜のあぬの尾 公羽

ひとあふ又うくをう〜日新う車 露沾

け〜〜〜ぬのあふへ掃くをき〜〜と 丈草

上 四二

艶々な句

めとてひくく人おぬしわめの杖

公羽

蜀魄おなをたるとて夜はまを

菊齡

花うらやわひとあつてよるさあを

支考

幽玄な句

秋の木の花ともさくさく白ひの如

公羽

おとつして郊のむはをむ流りて

山川

名月也新とてまのまあの本

昌房

なつとさる

林賢

初生の葉たてあをこころ人輪あやせん

公羽

形おるのそ花おる人乃長刀

去来

黄龍也二外五合の最年貢

曲翠

色々々々

卯のむやうぶ柳のぬいひはし

公羽

身ぬるひよき向の穂子の綿うれ

轍士

さくさく流やゆけく橋の下りてら

塵生

感情な句

酒のえんはいと痛くまねおのを

公羽

ひい垂あけの掃のまふこぬたりのおりの  
ほくくもを繪をうへる秋のふゆか  
一髪  
小春

観相

首のまの表えりあせり今秋の表  
えさくもむらうを相お  
木節  
越人  
昔は頼りて對を親お  
曲  
飛ぶうてをうてあつふ持ふお  
公翁  
矢のしり母の乳どのび鹿のまふ  
立志

炉をえくふ命はまは(控)の儀  
似草

春のあけ梅よぬを志すいりの  
公翁

較そくはふあふの浮揚かふふ也  
其角

相のうてまの朝白とあふふ亮  
不角

又

溝糸の目ふまはまふ麻のまふ  
翁

虫あけや猫の爪く周果経  
西吟

盗人の錢やくちの中らうか  
来山

又

きりぎのこやちきりねき時の繪のまじり

翁

ちきりぎや女その紙の板の色

鷺水

かきりねの橋や繪への百人一首

許六

又

艦の浮浪をうつて揚水る水や洞

翁

その地を浮浪葉い蓮風情をこえん

素堂

さめり山の坂よけり花のまじり

揚水

一作ある句

床より屏を軒ふりもやまじり

翁

馬もろの音も柱舟のあじし哉

曲翠

そえきんで紙幅をたぐる甚く哉

荷分

くまの句くまを俤悉くわの句を  
りくも皆ありくまのあふくまのくまの  
十人曰一俤くまのあふくまのくまの  
りくくまのくまのくまのくまのくまの  
はあ情を思ふくまのくまのくまの  
句くくまのくまのくまのくまのくまの  
くまのくまのくまのくまのくまの

回文

上 四十五



3

1

x

3

拾壹年正月五日

...

...

